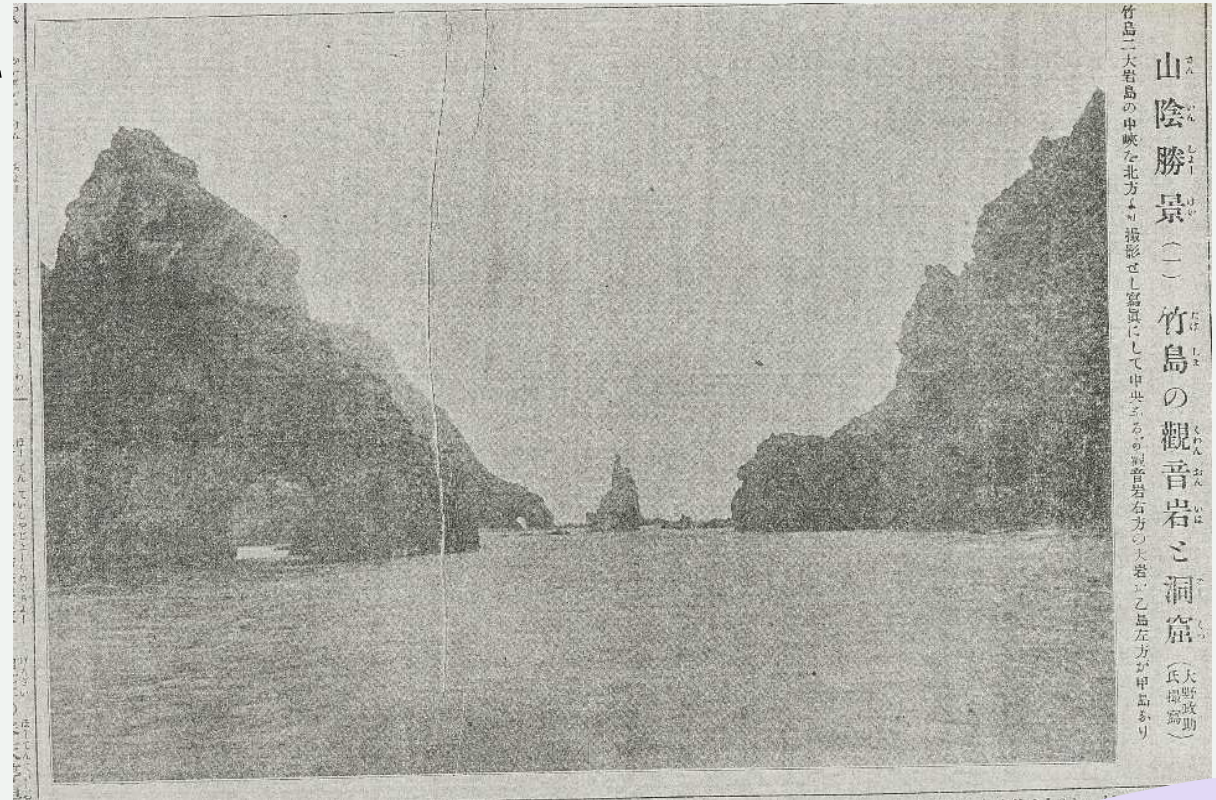


「碧雲切抜帖」を追って

— 竹島に関する
明治期の新聞報道 —



島根県竹島研究顧問

島根県竹島問題研究会委員

升田 優



23.12.18 地域面

山陰中央

(第3種郵便物認可)

島根県の竹島行政権裏付け

松永知事の視察記事発見

明治38年8月
報告会紹介

韓国に実力支配されている竹島（島根県隠岐の島町、韓国名・独島）が明治38（1905）年に島根県に編入されて間もなく、島を視察した当時の松永武吉県知事（1869～1936）の動向を報じた新聞記事が見つかった。山陰中央新報の前身、松陽新報の記事で、明らかになっていなかった視察の日程や意図が分かる。竹島の行政権行使に先導的役割を果たした点を裏付ける資料となる。

（奥原祥平）



奥原碧雲のスクラップ帳から松陽新報の記事を発見した升田優さん＝松江市内

記事は1905年8月22日付。県竹島問題研究顧問の升田優さん（71）が、郷土史家・奥原碧雲（1873～1935）年、松江市岡本町出身）の子孫を頼り、碧雲のスクラップ帳を発見した。保存が少ない松陽新報から竹島関連の記事が見つかるのは珍しい。

1905年8月21日午後、松永知事が約100人の聴衆に行った視察報告会を取り上げた。記事によると、同年2月22日の竹島の島根県編入告示を機に、視察を検討していた松永知事が、当時の内務省に赴いて費用捻出を受け、少人数の随行を伴い視察した。

一行は8月18日午後9時に美保関を出発し、19日午前8時ごろ、竹島付近に着。同9時半～午後0時半に上陸し、午後6時に現場を離れ、20日に十六島経由で松江に帰った。

記事で波風の激しさから島が脅張っていて土壌や樹木がなく、わずかに雑草が生えている点や、大きな洞窟がある地形を紹介。手書きのデッサンを加えた。多くのアシカが生息していた点を視認した松永知事が、報告会で皮や肉、脂肪の需要に触れ、竹島が重要な生産地点になるとし「本県においても種々の研究を重

ね、島の生産を保護し、県下の福利増進を期図すべし」と訴えている。

升田さんは、国費で視察した点や帰着直後の報告会開催などから「知事の強い意志とリーダーシップが感じられる」と述べた。

竹島問題に取り組む島根大の船杉力修教授（53）は、今後、問題が国際司法裁判所に付託された場合、日韓のどちらが先に竹島を占有し、行政権行使が行われたかが審理されると推察。編入直後の行政権行使の具体像が明らかになったのは、日本側の主張を補強できる大きな発見だ」と訴えた。

松永武吉島根県知事らの視察の際に描かれた竹島のデッサン



1. はじめに
2. これまでの認識 4 P
3. 明治期の新聞事情 8 P
4. 「碧雲切抜帖」の発見 10 P
5. 「碧雲切抜帖」の特徴 18 P
6. 新たな知見 19 P
 - ①松永知事の竹島視察談
 - ②新聞に掲載された初めての竹島全景写真
 - ③初めての竹島特派員による現地レポート
7. むすびに

明治39年島根県竹島調査団 報告書

神西団長

調査団45名

3月26日西郷港発

27日~28日

竹島~鬱陵島

3月29日西郷港着

報告者 奥原碧雲



竹島は、森々たる北海の波上、天涯一沫の巖嶼たるのみ。しかも、日本海を戦に依て、全世界に紹介せられ、永く戦史にその名を貽すに至れり。之より先き數月、該島は、本邦領土に編入、全時に島根縣所屬に定めらる、亦以て名譽の紀念となすへし。松永島根縣知事は、昨夏、先づ之を視察し、次て、今春、余等に命じて、再び之を視察調査を爲さしめらる。こゝに於てか、余及びその他の視察員並に便乗者一行四十余名、一小汽船第二隱岐丸を艦して航程に上る、時恰も荒天三月、海上穩かならず、怒濤狂瀾の澎湃難航として、動もすれば、進路を妨げんとするものありしも。幸に船長以下の熟練と盡瘁とに頼て、險を冒し、苦を忍び、遂にその目的を達し、進んで韓國鬱陵島一班の視察了へ、その視察調査せしところを復命せり。當時を回想すれば、轉た凄愴たるものなきにあらず、編者奥原君は、筆を載せて同行せし一人なり、今般之か復命書等を參酌し、茲に「竹島及鬱陵島」を編纂公にせらる。而して、その沿革情勢を叙

すること最も適實、蓋し、世に資益するところ尠からざるを信す、その勞多とすへし。一言以て序となす

明治三十九年七月

島根縣事務官

神西由太郎

竹島の歴史地理学的研究

川上健三著

資	092-1
	29-h
	9月7日
島根県立図書館	

古今書院

明治38年8月15日

竹島調査団の渡航延期

急遽、海軍御用船京都丸で竹島行き

- ・ 松永知事以下4名
- ・ 8月19日竹島上陸

(八) 知事、部長の巡視 竹島が島根県に編入された明治三十八年の八月には、松永武吉島根県知事は自ら同島を巡視した。当初の計画では、同知事は同月十六日朝、第二隠岐丸で境港を出発し、隠岐の西郷に寄港して島以下が一行に合流する予定であったところ、八月十五日に至り一たん延期となった。しかし、その後急に海軍御用船たる京都丸

第二章 竹島の島根県編入後の経過

三三三

丸で行くことになり、隠岐には寄港せずに松永知事、佐藤警務長、藤田県属、大塚警部の四名のみで八月十九日に竹島に直行、一行は同島に上陸して親しく状況を視察した。(八八)

さらに翌三十九年三月には、島根県第三部長神西由太郎は知事の命により隠岐島司東文輔以下四名を率いて竹島視察を行なった。一行は漁業、農事、衛生、測量等の多くの専門家を加えた大調査団で、同年三月二十二日松江発、西郷に寄港の上同月二十七日に竹島着、同島に上陸して視察および調査を了し、記念に松樹を植えたが、天候険悪のため辨陵島の道河に避難、同港に一泊の上二十九日に西郷に帰着した。その際の復命書を参酌して編纂したのが奥原碧雲の『竹島及辨陵島』である。なお神西部長は、辨陵島滞在中郡守沈興沢を訪問し、その際に竹島で獲ったあしかり頭を寄贈したが、その模様について奥原碧雲の前記著書の附録「竹島渡航日誌」の三月二十八日の項に、次のとおり記されている。

(往八八) 明治三十八年八月十九日に松永知事が竹島を巡視したことは、竹島海難漁業成積図(竹島漁業合資会社記録)の明治三十八年度の八月十九日の欄に「知事来臨」と記入されていること、京都丸に乗船した知事随員が竹島沖から東隠岐島司に宛てた軍事郵便はがきに、

「明治三十八年八月十九日新領土竹島ヲ巡視ス お先ニ失敬御免
一行ハ松永知事、佐藤警務長、藤田、大塚ノ四人」

と記されていること、同年八月二十二日付の『山陰新聞』に、松永知事の竹島視察と題して、

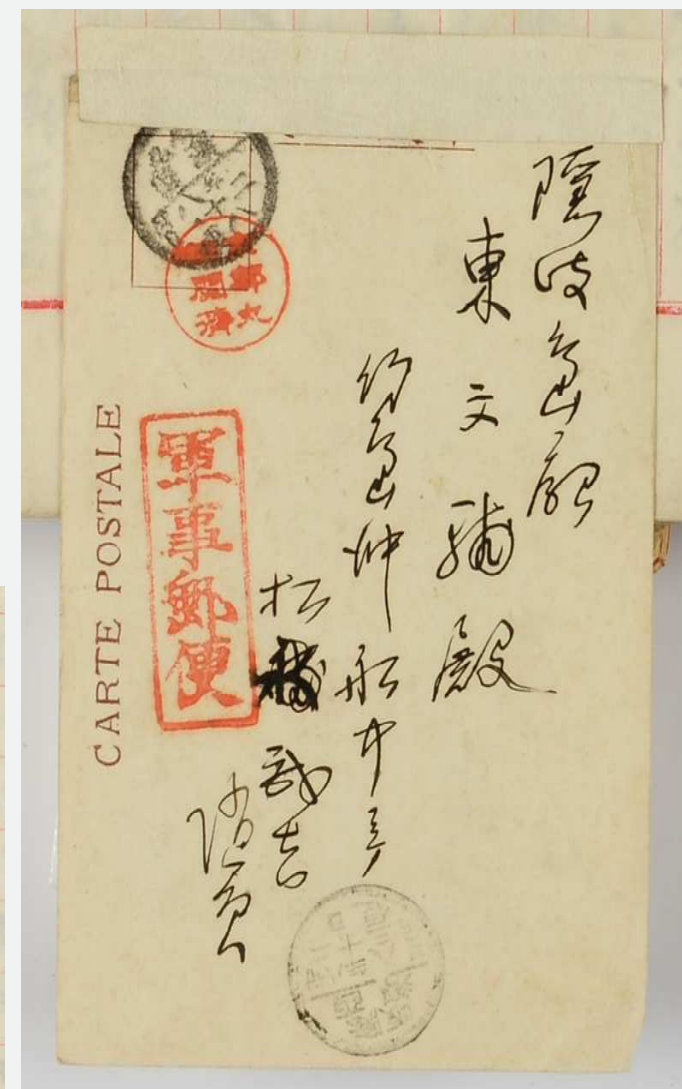
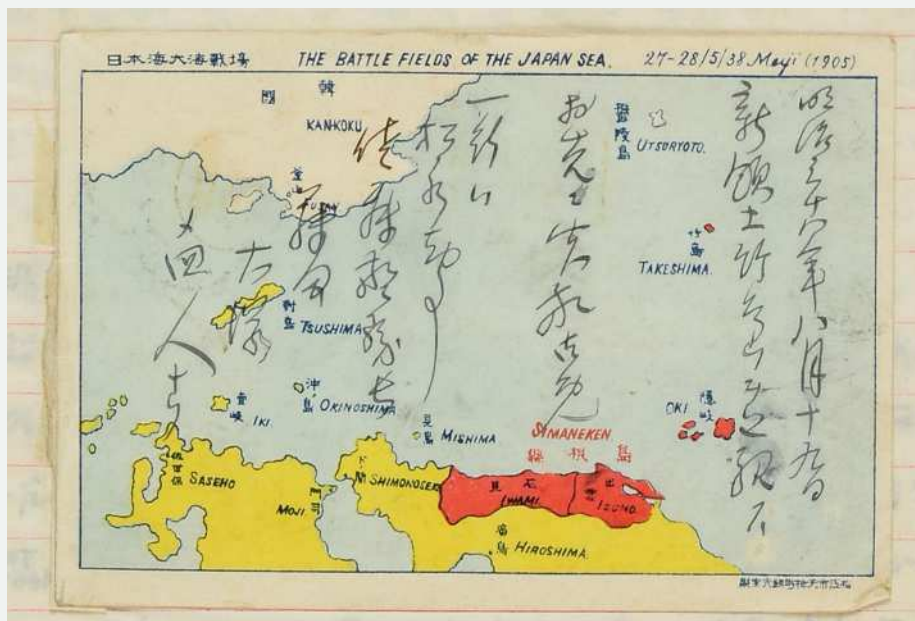
「松永知事は、藤田県属を随ひ佐藤警務長は大塚警部を随ひ去十八日便船にて隠岐島の新領土たる竹島に航行し、同島に上陸して親しく状況を視察し、一昨日帰松せり」

と報ぜられていること、さらに、奥原碧雲著『竹島及辨陵島』の明治三十九年七月の神西部長の序文中に

「松永島根知事は、昨夏、先づ之を視察し、次て、今春、余等に命じて再び之を視察調査を為さしめらる」とあること、等からも明らかである。

軍事郵便ハガキ（明治38年8月19日）

- ・ 京都丸の消印
- ・ 「お先に失敬御免」の文字
- ・ 4名の名前
松永知事（松永武吉）
佐藤警務長（佐藤孝三郎）
藤田縣属（藤田幸年）
大塚警部（大塚松之丞）



山陰新聞の記事

・M38.8.18 「竹島行期日」

「県内官民の竹島行は天候不穩の為め当分延期に決せし（略）来九月二十日前後に出発することに決定せり」

・M38.8.22 「松永知事の竹島視察」

「松永知事は藤田県属を随ひ佐藤警務長は大塚警部を随ひ去る十八日便船にて隠岐国の新領土たる竹島に航行し同島に上陸して親しく状況を視察し一昨日帰松せり」

・同 「県庁内に海豚放養」

「松永知事の一行は漁民の捕獲せる本年生の海豚三頭を貰ひ受けて帰松し昨日県庁第三部庭内の溜池へ放流して当分飼養することとせり」

・M38.8.23 「県廳内放養の海鹿」

「海鹿三頭は一昨日は余程衰弱せし様に見受けられしも昨日は八束郡惠曇の水産試験場より取寄せたる鹹水を該池に入れしより非常の元気となり」

・M38.8.30 「隠岐通信」

「竹島へ移植すべき見込にて小松拾数本島廳にて培養し居れり」

・M38.9.5 「剥製の海驢」

「水産試験場に於て飼養中なる海驢三頭の内一頭は去る二日斃死せしを以て松江に搬送し末次本町米原伊之助に剥製せしむることとなりたり」

明治期の新聞事情

山陰新聞

- ・山陰新聞の誕生について、「明治15年5月1日、山陰新聞の第一号が松江で発刊される。島根県では、それまでにいくつかの新聞が発刊されていたが、タブロイド判4ページの隔日刊ながら、定時刊行をうたった県内で初めての新聞らしい新聞であった」と。
- ・「大正以来、構造的に経営難が続いていたが、昭和に入ると早々の金融恐慌、それに続く世界的経済恐慌もあって、さらに苦しくなっていた」、「経営難の原因について、差し当たっての病弊は集金の不良であった。たとえ収支のバランスは保っても現金不足はどうすることもできなかった」と。

(出典) 山陰中央新報社社史

松陽新報

- ・松陽新報の発刊については、「明治34年(1901)11月3日、山陰新聞とともに本紙の前身である松陽新報が、この日創刊された。明治十年代以降松江で三回の新聞発刊に参画しながら、創刊にこぎつけたものであった」と。
- ・いずれも志を得なかった岡崎運兵衛が、満を持して松陽新報社は日露戦争中から急速に発展、明治40年の決算で純益約七千円を上げた。岡崎社主は「新聞社も手狭になっている。これで新しい社屋を建てよう」と即断。早速新社屋建設の準備にかかるよう指示した。松陽新報社屋について「この西洋建築の社屋が出現したとき、市民はアッと驚いた」と。

両新聞の比較

■山陰中央新報社社史には

- ・「山陰新聞は印刷も悪く、都会地の広告主が一県一紙を選んで広告を出すとすれば、必ず松陽が選ばれた」とか、
- ・「もともと読売新聞の山陰進出の標的は当時発行部数三千部の山陰新聞ではなく、その倍以上の八千部を持つ松陽新報の買収だった」との記述がある。

■また、「新聞研究昭和30年4月号」（社団法人日本新聞協会）によれば、

- ・明治33年頃の山陰新聞の経営内容は発行部数三千余。明治34年11月創刊の松陽新報は、当時二千部を印刷。日露開戦とともに松陽の社長岡崎は自ら陣頭に立って全県下に遊説をこころみて大いに国論喚起につとめたが、これが読者獲得に大いに役立ち、戦争半ばにして早くも先進の山陰をしのご勢力を勝ち得た。
- ・昭和年代に入ってから両紙は紙数において既に山陰は松陽の敵ではなかった。昭和13年9月末現在で某官庁の推定した各紙の県下販売紙数は

(地元紙) 松陽 1万2千5百 山陰 8千

(県外移入紙) 朝日1万9千 毎日1万8千2百 福日5千5百 山日千5百

碧雲切抜帖



碧雲作成の新聞スクラップ
(松江市松江城・史料調査課保管)

奥原碧雲

本名は福市、碧雲は号。明治6年（1873）4月1日、秋鹿郡岡本村（現在の松江市岡本町）に生まれる。教育者、文筆家、歌人として幅広い分野で活躍。

昭和10年（1935）、自宅で死去（63歳）



島根県立大学松江キャンパス保管資料から
秋鹿村小学校長時代（奥原秀夫氏蔵）



「竹島及鬱陵島」所収

奥原碧雲

- 明治27年島根県尋常師範学校を卒業。三刀屋村尋常高等小学校訓導を振り出しに、教育者としての道を歩む。明治29年郷里の岡本尋常小学校に転任、その後村内にあった三つの小学校の統合に尽力し、統合後の秋鹿村尋常高等小学校の校長となった。
- その後、八束郡教育の指導、女子教育の振興、社会教育など34年の長きにわたり教育の進展に寄与し、本県教育界に大きな足跡を残した。大正3年2月11日、文部大臣より小学校教育功績状を授与された。地元有志により昭和12年秋鹿村小学校校庭に銅像が建立（昭和27年に再建）された。
- また、多芸多趣味の人で、特に文才に長じ、多くの著書を世におくり、また新聞雑誌などにも論説・紀行・随筆・詩歌の類を数え切れないほど寄稿している。歌会「しののめ会」を結成し、明治30年代の山陰文壇を代表する詩文家となった。
- 明治39年竹島を視察し、『竹島及鬱陵島』を著して竹島研究に先鞭をつけて以来、郷土の地理・歴史の調査研究にも力を注いだ。主な著書として、『島根県名勝誌』『島根県遊覧案内』『八束郡秋鹿村誌』『八束郡誌』『隠岐島誌』など。

■出典（明治百年島根の百傑、島根県歴史人物辞典）

奥原家資料の調査経過

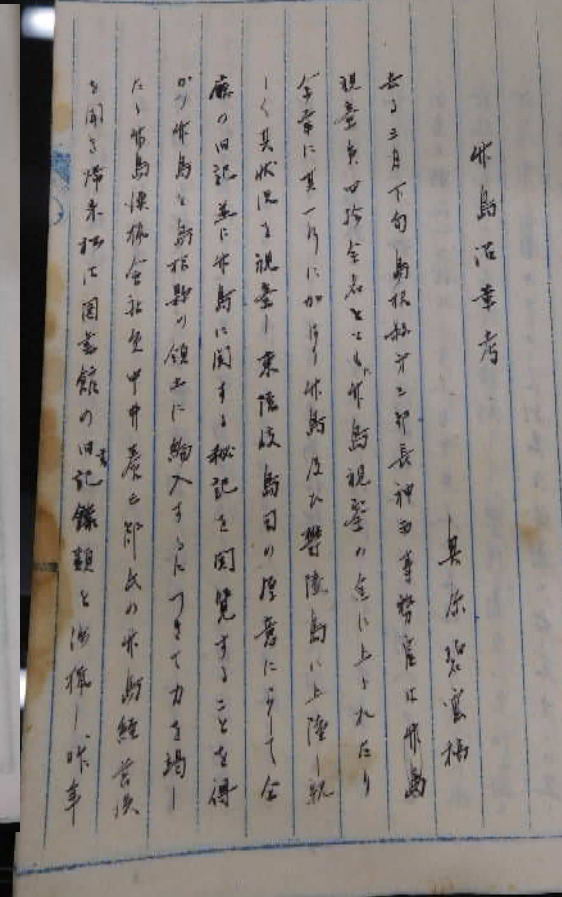
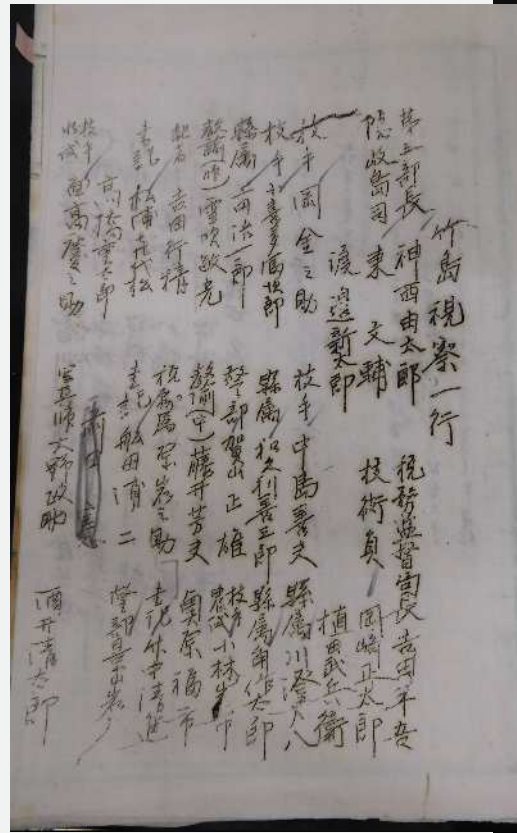
	歌人関連	郷土誌関連	竹島関連	書籍	草稿	切抜帖
平成5年頃 島根女子短期大学寺本教授が奥原家を調査 碧雲切抜帖をコピー	調査					複写・原本返却
平成10年 奥原秀夫氏が寺本教授に寄贈 以後、大学で資料は管理	寄贈	寄贈		寄贈	寄贈	■コピー
平成18年 島根県竹島問題研究会が奥原家を訪問			調査			
その後 奥原秀夫氏から島根県に寄贈 (平成25年秀夫氏死亡)			(立志伝外)			
平成26年 松江市史料編纂室から島根県に提供			提供			
平成27年 秀夫氏の親族から松江市が資料借用	資料	資料				□原本
令和3年5月 島根県立大学を調査			調査			<u>碧雲旧蔵資料を確認</u>
令和5年9月 奥原家を調査 松江市松江城・史料調査課を調査			調査 調査			<u>切抜帖原本を確認</u>



碧雲の三男；奥原秀夫氏
平成18年島根県竹島問題研究会調査

奥原碧雲生家と書斎

書籍等、草稿等



島根県立大学松江キャンパス図書館保管資料

碧雲旧蔵資料の概要

- ・ 碧雲切抜帖を含む資料は、碧雲の三男である奥原秀夫氏から島根県立島根女子短期大学（現島根県立大学松江キャンパス）に寄贈されたもので、平成10年に、当時の附属図書館長であった寺本喜徳教授が整理され、現在同図書館で保管されている。

- ・ 竹島関連の資料は、主に書籍等、草稿等、新聞記事等に大別されるが、その多くが竹島が明治38年に島根県に編入された直後のものであり、その主な著作である『竹島及鬱陵島』をはじめとして、「竹島」認識の定着化に大きな役割を果たしてきた。

また、資料の多くは県立図書館にも収蔵されていないなど、貴重なものが多い。

- ・ 碧雲切抜帖については、従来田村清三郎氏の資料などにより知られていた「山陰新聞」の記事ではなく、「松陽新報」の記事がスクラップされており、両者の記事について比較検討が期待される。

松陽新報

■宍道町庄司家資料

- 島根県立図書館では、明治期における松陽新報の保存は、極めて少ない。

そうした中で、平成26年杉原隆前島根県竹島問題研究会副座長が調査され、松陽新報を相当程度まとめて所蔵されていた松江市宍道町の庄司家の資料を新たに見つけられたのは貴重であった。

- 平成27年2月22日に開催された「竹島の日十周年記念式典」において、

「明治38年2月22日竹島が島根県所属となったことや明治39年の竹島・鬱陵島への島根県調査団の行動等に関する記事を提供いただいた。初めて山陰新聞以外の新聞でも、島根県の竹島所管が報じられていたことがわかり、竹島に関する研究の新たな資料となった」

として、資料の寄贈者である庄司武久氏に知事から感謝状が贈呈されている。

平成27年2月23日
山陰中央新報

新たな資料や証言提供
県が5人に感謝状

記念式典では、竹島研究(84)―東京都板橋区―は、
に関する新たな資料や証言 竹島での最後の漁業権行使
を提供した5人が、溝口善 となった1954年5月の
兵衛島根知事から感謝状 隠岐の島町の漁師らの出漁
を受けた。 に、県の取締船の甲板員 吉田徹さん(81)、八幡智
5人のうち、野津豊さん として同行。当時撮影した は、36、38年の竹島漁猟を

写真や自らの証言を昨年4
月に県竹島資料室へ寄せ
た。
韓国が李承晩ラインを設
定した2年後の出漁で、
野津さんは「竹島に着く
まで、どこに行くか教えて
もらわなかった」と振り返
る。
肉親が自ら記した記録を
資料室に託したのは、島根
県隠岐の島町久見、八幡智
之さん(62)、同町栄町、
吉田徹さん(81)、八幡さん

記した祖父の日記を、吉田 佐々布、庄司武久さん(77)
さんは昭和初期に祖父が竹
島で使った漁船のイラスト
などを提供した。
このほか、松江市宍道町
記した祖父の日記を、吉田 佐々布、庄司武久さん(77)
さんは昭和初期に祖父が竹
島で使った漁船のイラスト
などを提供した。

感謝状を受け取った、左か
ら庄司武久さん、手崎りえ
子さん、野津豊さん、八幡
智之さん、吉田徹さん。松
江市殿町、島根県民会館

碧雲切抜帖の特徴と新たな知見

1) 碧雲切抜帖の特徴

・ これまでに判明していた竹島関連の新聞記事は、新聞の保存状況も反映し、「全体的な情報量として山陰新聞の方が竹島関連記事が多く、特に明治38年の松永知事の渡航関連記事や明治39年の島根県調査団の関連記事は山陰新聞の方が詳細」という状況であった。

・ 碧雲切抜帖は、これまで明らかでなかった松陽新報の記事を中心とするもので、かつ、その内容は質量ともに充実し、明治期における竹島認識に新たな調査・研究材料を提供する。

・ 韓国側には「島根縣が秘密裏に竹島の編入を行った」との主張もあるが、碧雲切抜帖を含む碧雲旧蔵資料（書籍等、草稿等、新聞記事等）は、その多くが竹島の島根県編入直後のもので、県民の「竹島」認識の定着化と関心に大きな役割を果たしたと考えられる。

2) 新たな知見

碧雲切抜帖において、新たな知見が得られた点は、特に次の三点である。

- ① 松永知事の竹島視察談
- ② 新聞に掲載された初めての竹島全景写真
- ③ 初めての竹島特派員による現地レポート

①松永知事の竹島視察談

- ・ 明治期における竹島に関する調査報告等
明治39年3月の竹島視察団の報告「竹島及鬱陵島」、東島司の復命書、山陰新聞記事
- ・ 松永知事が明治38年8月に急遽竹島を視察したことはよく知られていたが、碧雲切抜帖により視察直後に、縣廳でその状況について講演していたことが初めて判明した。

1. 松永知事の新たに編入した竹島視察への強い意思がうかがわれる。

- ・ 視察を事前に内務省に相談し、国の費用で行ったこと
- ・ 急な日程変更という事情があるにもかかわらず、竹島視察を決断したこと
- ・ 8月19日の竹島視察後、直ちに報告会を行った（21日午後1時）こと
 - * 報告会には百十数名が参加し、竹島への関心が高かったことがうかがわれる

2. 松永知事の視察状況が初めて明らかになった。

- ・ 視察の経緯と詳細な日程が明らかとなったこと 【8月18日夜9時美保関出帆、19日朝8時竹島着、9時半から12時半まで上陸、午後6時出帆、20日十六島経由、松江に帰着】
- ・ 報告内容は、竹島を間近に見た具体的な観察記録となっていること。例えば、漁獵会社の小屋、飲料水などが詳細に記述されていること。また、竹島の手書きデッサンも付されている。

りて死したるは惜むるに因るや將た金の死は僧僧を看破せられしに因るや將た金の品強奪の手段に會ひたるに因るやは知るに由なきも氏が民家の壁に認めしは大日本帝國島根縣石見郡那賀郡波佐村出身能海寛の文字と辭世の歌とにて藤井土川少佐、西藤を巡廻して同一民家に宿し圖らずも萬辭世を讀みて能海氏の横死を知り少佐は之を目

二時以上は涉り地圖及び持歸りたる標本に就て一々説明を爲したるが大に聽者の興味を惹起したるものありき左に其の要領を掲ぐ因みに標本は海鰐皮、齒牙、鬚、其地産石、所生の草などにして來會者の縦覽に供したり

十八 偶然の機會に依り、其汽船に便乗し竹島に渡航することを得たり、全日一行は美保關に赴き其處を待合せしが天候の爲め一時出航を見合すに至らんとせしも交渉の結果、全夜九時出帆、一時開十節の速力を以て百二十四五海里を直行し翌朝八時頃竹島附近に着したり、海上は幸に穏和なり

近は海底如く深く船を停泊せしむる能はず、依て即ち汽船を洗しつゝ、錨を下し、九時半上陸視察を爲し、十二時半歸船、午後六時半帆漕船の都合に依り、翌二十日午前七時頃渡川郡北濱村十六島に達つて貰ひ、夫れより平田を経て歸松せり、是れ今回行程の概要なり

本島は本年二月二十二日を以て本縣の版圖に屬したるを以て、一度夫々専門家を引率し視察せんと欲し、上京の際内務省に由頭し其費用を貰ひたるに恰も五月二十七八日の大海戦あり、渺たる一孤島竹島は光榮ある歴史を有するに至り、非常の有名となり其視察計畫も非常の人氣となりしも、船船の都合悪くして好期を逸し漸く準備成りて去十六日出發せんとするに當り、天候不良となり當分延期するに至りしが、幸にして偶然の好機會あり便乗を勧められしを以て余等一行は先づ探險的に渡航したる次第なり

竹島は海關にはリヤンコールド岩とあり三ツの点を附せるのみ、其渺たること以て知るべし、隱岐より八十五哩、濱田よりは百五十哩あり、大さは一見十四丁位ならん、全島は全然骨ばかりにして風浪激烈なる爲め、土壌全く洗ひ去られ樹木の如きは一本も無し、僅に雜草あるのみ、それも水平より二十尺以上にして溪間々に生せるのみ島は二ヶの大巖と無數の小巖より成り、端巖は二巖相合する所格も海形を爲したる所に入るべし、例の中井養三郎等の竹島漁獵會社の獵小屋は灣内右方島に在り、遠く島を望めば恰も一ヶの島の如く、劍山の骨立し、近づくに従ひ漸く二ヶより成れるを見る、余等は素より専門家ならざるも其火山巖なることは儘なりと首肯せらるるより是より視察の模様を述べんに始めて島を望むに左方に當りて帆船の帆を孕まして遊弋

得ん

昨日午後一時過より縣會議事室に於て松永知事は竹島視察談を爲せり聽集は縣廳を始め市内官公衛吏員、縣立學校教員、市内紳士、婦人等百餘名に於て談話は

竹島視察談

せる如きを見しが近づけば是れ一大洞窟にして水色紺碧を爲せり、凄壯蓋し天下の奇觀なり、島は前陳の如きを以て殆んど平地無し、たゞ右方巖高地に少しく平坦なる所あり、而かも是に登らんとせば巖石を攀ち危險と困難の嘗めざるべからず、自分等は島めぐりを爲したるを以て山上の模様を見ざりしも、同所には又一害ありて深く海底に直下し、ガラン洞となり海水を湧へ一見要絶なるものありと

漁獵會社の小屋は去八日の大風雨にて家什食物を併せ全く洗ひ去られ漁舟八隻も一小舟を除き全く流失し、現今は僅に其小舟にて漁獵を爲しつゝある有様なり

海鰐(俗にミチ)は毎年四月より七八月迄最も多く、最早餘程少なくなりたりと漁師等は談りたるも尙極めて多數にて船より望めば水上に頭を出して盛んに吠ね居たり、島廻りする時も彼等は岩上に遊び眠るを見たり、最も多きは六月頃子を産出し哺育する際にして、彼等はオットセイと同じく子を愛すること甚だしければ愛に引かれて空しく獵夫の銃丸に斃るもの多しと(左岩北方洞窟最も多し)獵夫の獵するは親ミチのみにて仔ミチは獵せず、爲に仔ミチは更に人を畏怖せず人を見れば直ちに岩より海底に身を躍らし隠くるも暫らくすれば俯上りてワン／＼吠ねながら不思議さうに人の姿を見居るなり、總て彼等はよく睡り一二匹づつ、交替して歩哨の任務に従事し居るなり、兎に角海鰐の多きことは非常にして去八日の大荒にて風波の爲め死し將に死し頻せんとするもの少なからず見受たり其他の海産物は鵝の多きことなり其他水鳥、鮫、安貝、烏帽子貝などあり (未完)

竹島視察談(續)

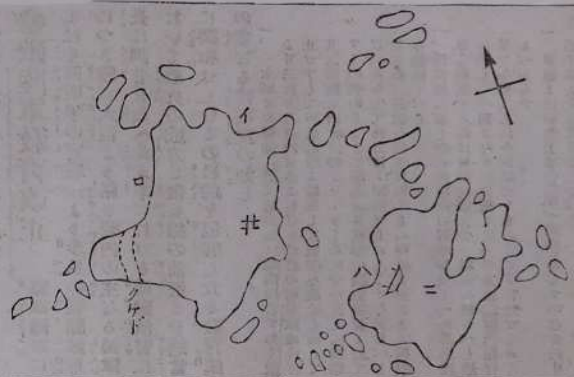
(松永知事談話の要領)

余等の想像を以てせば、大古は現在の骨立せる二岩と無數の小岩は合して一島を形成せしが、風浪のために洗ひ去られて、今日の骨ばかりとなりたるにはあらざるかと思はる、他日専門家の視察研究を待つべし、上陸するに足るべき地點としては前記獵小屋のある所と外二ヶ所にして其他は總て斷崖絶壁にして奇景少なからず、北方兩大岩の間に見られたる一岩の如きは宛然たる魚卵觀者を爲す、取敢へず觀者岩と命名したる次第なり海鰐の遊び場房と云ふべきか最も集合しよく喜劇し、死んだやうに睡つて居る所三ヶ所()許りあり

次ぎに飲料水の事なるが左岩に二ヶ所清水の迸出する所あり右岩にも一ヶ所あるも鹽分を帯び、且つ之を飲めば不思議に脚氣

明治38年8月22日付、松陽新報

竹島平面圖



圖中イ、ロ、ハの三点は船舟の碇泊し得る地点、海嶺はイの地帯に於て主として噴出ロの邊に最も多く上陸して遊ぶ、井は清水の湧出する地、家屋形は漁獲賣社の小屋、ニの邊は頗平坦なり

戦利艦命名

り命名されたり

相模

(戦艦二二、六七四噸)

丹後

(戦艦一〇、九六〇噸)

阿蘇

(装甲巡洋艦七、八〇〇噸)

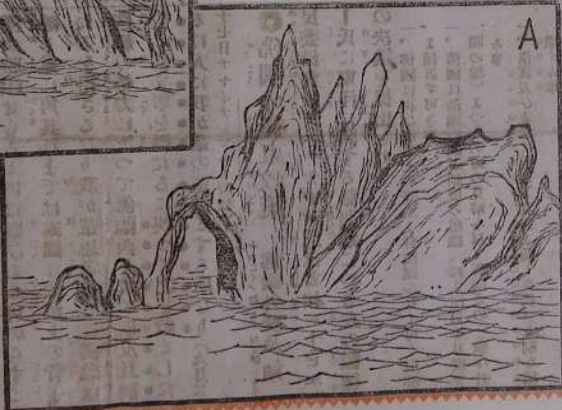
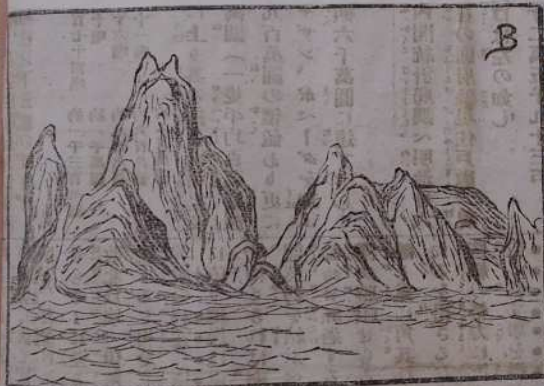
津輕

(巡洋艦六六、三三〇噸)

宗谷

(巡洋艦六、四〇〇噸)

ベレスウエット
ボルタワ
バーヤン
バルラダ
ワリヤグ



竹島

Aは東南方より航進したる遠望にして宛然一個の巨巖海中に聳立せる如く左方の空洞は潜門なり漸く近づくに従ひB圖の如く二個に區別せるを見る右方巖上比較的平坦なる所唯一の緊要なる平地なり

症に取つかるとなり現に頗る重体のものあり氣の毒に感じたり、其他多少其死候にて水腫せるものを見交けたり、尤も漁業者は早晩漁期を終り歸郷すべし、今日に於ては海嶺以外何等の生産物無し、然れども海戦以來更に本島が重要な地点となりしことを諸君の觀察を希望す
序に海嶺の需用に就て一言せんに、三十六年之を獵し大坂に輸出したるものありしも全く失敗せしが、翌年に至り多少の需用あり、今日に至りては製革業の進歩と需用の増加とによりて今までは軍隊用背蓋の表に附したるものは牛皮の代用となるに至り脂肪は精製して鯨油に劣らざる良品を得べく、肉は食用とすべく又肥料に供せらる、油糟は膠に用ゆべき見込みありと云ふ、以上は僅々數時間の觀察にして殊に専門智識を以て調査したるにあらざれば淺薄皮相を免れざるべしと雖も大要は誤無きを信ず、近き將來に於て豫て計畫せる趣味ある竹島行を實行する場合には各専門家の精確なる調査を爲すことなるべし、尙將奉本縣に於ても種々研究を重ね、同島の生産を保護し、以て本縣下の福利を増進することを期圖すべし云々(終)

1 6代島根県知事 松永武吉

自 明治37年11月17日
至 明治41年 3月28日



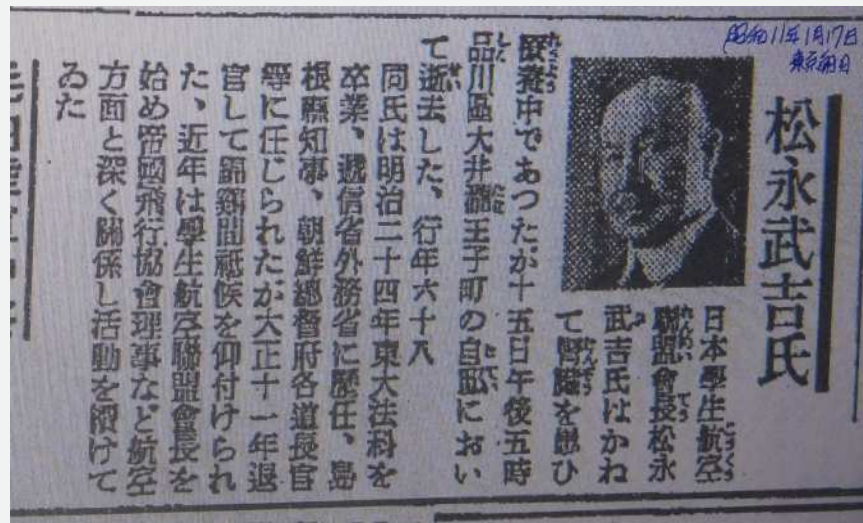
松永 武吉 (まつなが たけきち/ぶきち)

1869年(明治2年)11月19日~1936年(昭和11年)1月15日)、日本の逓信・朝鮮総督府官僚。官選島根県知事

経歴

鹿児島県で旧薩摩藩士松永包泰の二男として生まれる。1891年7月、帝国大学法科大学を卒業。同年8月、逓信省に入省、以後、逓信省事務官、同大臣秘書官、同大臣官房秘書課長、横浜郵便電信局長、逓信省総務局文書課長、大阪通信管理局長などを歴任。

1904年11月、島根県知事に就任。1908年3月、知事を休職となり、1910年10月、朝鮮総督府に転じ平安南道長官に就任。1916年3月、京畿道長官に転任。1919年8月、官制改正により京畿道知事等を歴任、1922年9月に依願免官となり退官。



エピソード（高岳自叙伝；佐藤孝三郎）

■明治元年生まれ。明治38年2月から明治39年7月まで島根県勤務。その後、福井県知事、名古屋市長、函館市長などを歴任。

「この大海戦はその全部が本県の領海沖で行われたもので、公報には日本海海戦は『リャンコルト岩』に於て終る、と記載された。実はこのリャンコルト岩とは、本年初め本県所属竹島と官報にて公示されたもので鬱陵島に隣れる島で、後官報で訂正された。戦後、余は知事とともに竹島を視察した。同島には望楼があり、全島岩ばかりの小島で、海豚の巣窟で群棲して盛んに繁殖していた。

大海戦の数日後飛電あり、東郷司令長官は第一艦隊全部を率い本県三保の関に入港すべし、と。約十隻の艦影は真に威風堂々海を圧して来り泊した。」

「司令官旗は旗艦三笠に高くひらめいている。汽艇もて余等を迎えられ、三笠旗艦に着け、厚い礼を以て迎えられた。長官室に招ぜられ、大戦勝に輝やく東郷中將の前に知事と余と三人対した。知事は薩摩の人で、将軍とは多少の面識もあったので、『松永さんいかがですか』との挨拶だけであった。知事は『はい』と答えて、『さてこの度の大勝利まことに働きの程感じ入りました。国民も大いに安心いたしました』との旨を語り、深く中將の武功を賞したが中將はただ『はい』と答えられたままで言葉はない。かようにして余等は大海戦後真先に司令長官に親しくお目にかかり御祝を述ぶる大光栄を得たのであった。後刻堂々と出港さるる艦影を見送った。実に時といい人といいこの会見は誰も得がたい一大の光栄であった。」

島根県編入前後の動き

年表「行政権の行使」

1904年 (明治37)	<ul style="list-style-type: none">• 中井養三郎、「リャンコ島領土編入並びに貸下願」を内務・外務・農商務の三大臣に提出 (9.29)• 島根県内務部長書記官堀信次、隠岐島司東文輔にリャンコ島の命名を問合せ (11.15) → 隠岐島司、所管について了承し島名を「竹島」とすべきと回答 (11.30)
<u>1905年</u> (明治38)	<ul style="list-style-type: none">• 日本政府、竹島と名付け島根県所管隠岐島司の所管する旨を閣議で決定 (1.28)• 内務大臣、島根県知事に対し竹島を島根県所属隠岐島司の所管としその旨管内に告示するよう訓令 (2.15)• 島根県知事松永武吉、島根県告示第40号により竹島の島名とその所管を公示 (2.22)• 島根県、漁業調整規則を改正しアシカ漁を許可漁業とする (4.14)• 島根県、竹島を隠岐国四郡の官有地台帳に登録 (5.17)• 中井養三郎ら、竹島漁猟合資会社を設立 (6.3)• 島根県、竹島漁猟合資会社にアシカ漁を許可 (6.5)■ <u>島根県知事松永武吉、竹島を視察 (8.19)</u> * 8.21報告会
1906年 (明治39)	<ul style="list-style-type: none">• <u>県調査団 (神西由太郎第3部長外44名)、境港から第2隠岐丸に乗船し竹島へ出発 (3.22)</u>• 奥原碧雲、「竹島経営者中井養三郎氏立志伝」を著述 (5.20)• 島根県、竹島漁猟合資会社に5年間の竹島借用を許可 (7.2)
1907年 (明治40)	<ul style="list-style-type: none">• 奥原碧雲、「竹島及鬱陵島」を発行 (5月)• 海軍水路部、竹島の「経緯度実測原簿」を作製

竹島視察談 (碧雲切抜帖所収)

* 明治38年8月22日付け 松陽新報

昨日午後一時過ぎより縣會議事堂に於て松永知事は竹島視察談を為せり聴集は縣廳を始め市内官公衙吏員、縣立学校教員、市内紳士、婦人等百十数名にして談話は二時間以上に涉り地図及び持帰りたる標本に就て一々説明を為したるが大に聴者の興味を惹起したるものありき左に其の要領を掲ぐ因みに標本は海驢皮、齒牙、鬚其他巖石、所生の草などにして来会者の縦覧に供したり、

十八日偶然の機会に依り、某汽船に便乗し竹島に渡航することを得たり、全日一行は美保関に赴き汽船を待合せしが天候の為め一時出航を見合すに至らんとせしも交渉の結果、全夜九時出帆、一時間十節の速力を以て百二十四五海里を直行し翌朝八時頃竹島附近に着したり、海上は幸に穏和なりしも暮暑甚だしく随分閉口

したり、竹島附近は海底頗る深く船舶を停泊せしむる能はず、依て静に汽船を流しつゝ端艇を下し、九時半上陸視察を為し、十二時半帰船、午後六時出帆汽船の都合に依り、翌二十日午前七時頃簸川郡北濱村十六島に送って貰ひ、夫れより平田を経て帰松せり、是れ今回行程の概要なり、

本島は本年二月二十二日を以て本縣の版図に属したるを以て、一度夫々専門家を引率し視察せんと欲し、上京の際内務省に出頭し其費用を貰ひたるに恰も五月二十七八日の大海戦あり、渺たる一孤島竹島は光榮ある歴史を有するに至り、非常の有名となり其視察計画も非常の人気となりしも、船舶の都合悪くして好期を逸し漸く準備成りて去十六日出発せんとするに当り、天候不良となり当分延期するに至りしが、幸にして偶然の好機会あり便乗を勧められしを以て余等一行は先づ探險的に渡航したる次第なり、

竹島は海図にはリヤンコールド岩とあり三ツの点を附せるのみ、其渺たること以て知るべし、隠岐より八十五哩、濱田よりは百五十哩あり、大きは一見十四丁位ならん、全島は全然骨ばかりにして風浪激烈なる為め、土壤全く洗ひ去られ樹木の如きは一本も無し、僅に雑草あるのみ、それも水平より二十尺以上にして溪間々々に生ぜるのみ 島は二ヶの大巖と無数の小巖より成り、端艇は二巖相合する所恰も湾形を為したる所に入るべし、例の中井養三郎等の竹島漁獵会社の獵小屋は湾内右方島に在り、遠く島を望めば恰も一ヶの島の如く、剣山的に骨立し、近づくに従ひ漸く二ヶより成れるを見る、余等は素より専門家ならざるも其火山巖なることは慥なりと首肯せらるゝなり

是より視察の模様を述べんに始めて島を望むに左方に当たりて帆船の帆を孕まして遊弋せる動きを見しが近づけば是れ一大洞窟にして水色紺碧を為せり、凄壯蓋し天下の奇観なり、島は前陳の如きを以て殆んど平地無し、たゞ右方巖高地に少しく平坦なる所あり、而かも是に登らんとせば巖石を攀ち危険と困難を嘗めざるべからず、自分等は島めぐりを為したるを以て山上の模様を見ざりしも、同所には又一窖ありて深く海底に直下し、ガラン洞となり海水を湛へ一見凄絶なるものありと、

漁獵会社の小屋は去八日の大風雨にて家什食物を併せ全く洗ひ去られ漁舟八隻も一小舟を除き全く流失し、現今は僅に其小舟にて漁獵を為しつゝある有様なり、

海驢（俗にミチ）は毎年四五月より七八月迄最も多く、最早余程少なくなりたりと漁師等は談りたるも尚極めて多数にて船より望めば水上に頭を出して盛んに吠え居たり、島廻りする時も彼等は岩上に遊び眠るを見たり、最も多きは六月頃子を生産し哺育する際にして、彼等はオットセイと同じく、子を愛すること甚だしければ愛に引かれて空しく獵夫の銃丸に斃るゝもの多しと（左岩北方洞窟最も多しと）獵夫の獵するは親ミチのみにて仔ミチは獵せず、為に仔ミチは更に人を畏怖せず人を見れば直ちに岩より海底に身を躍らし隠くるゝも暫らくすれば匍上りてワンワン吠えながら不思議さうに人の姿を見居るなり、総て彼等はよく眠り一二匹づゝ交替して歩哨の任務に従事し居るなり、兎に角海驢の多きことは非常にして去八日の大荒にて風波の為め死し將に死に瀕せんとするもの少なからず見受たり其他の海産物は鷗の多きことなり其他水鳥、鮑、袋貝、烏帽子貝などあり（未完）

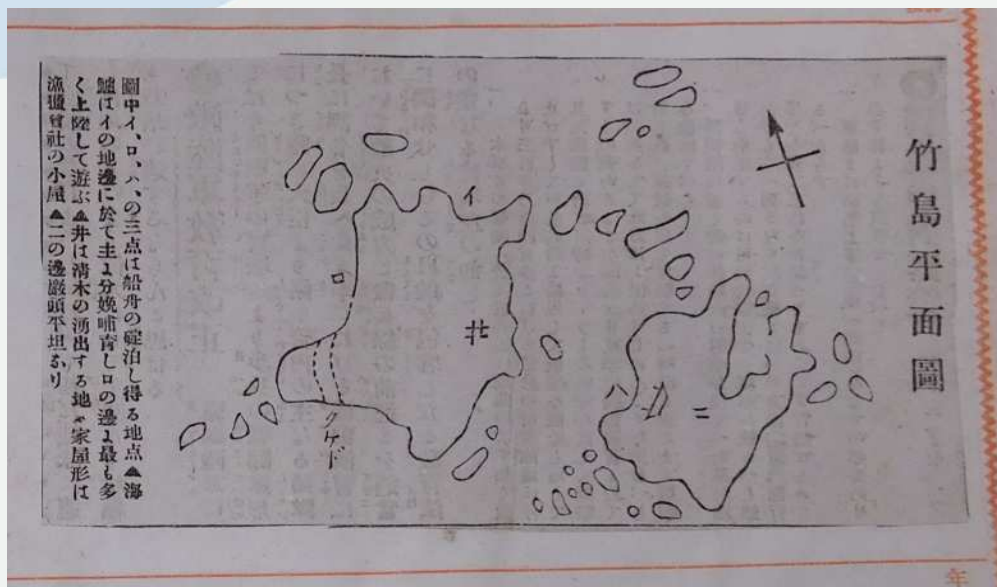
竹島視察談（続）（松永知事談話の要領）

余等の想像を以てせば、大古は現在の骨立せる二岩と無数の小岩は合して一島を形成せしが、風浪のために洗ひ去られて、今日の骨ばかりとなりたるにはあらざるかと思はる、他日専門家の視察研究を待つべし、上陸するに足るべき地点としては前記獵小屋のある所と外二ヶ所にして其他は総て断崖絶壁にして奇景少なからず、北方兩大岩の間に現はれたる一岩の如きは宛然たる魚柳観音を為す、取敢へず観音岩と命名したる次第なり海驢の遊び場所と云ふべきか最も集合しよく喜戯し、死んだやうに眠つて居る所三ヶ所（？）許りあり、

次ぎにも飲料水の事なるが左岸に一ヶ所清水の
迸出する所あり右岸にも一二ヶ所ある塩分を帯
び、且つ之を飲めば不思議に脚気症に取つか
るゝなり現に頗る重体のものあり気の毒に感じ
たり、其他多少其兆候にて水腫せるものを見受
けたり、尤も漁獵者は早晚漁期を終り帰郷すべ
し、今日に於ては海驢以外何等の生産物無し、
然れども海戦以来更に本島が重要な地点となり
しことをは諸君の黙契を希望す

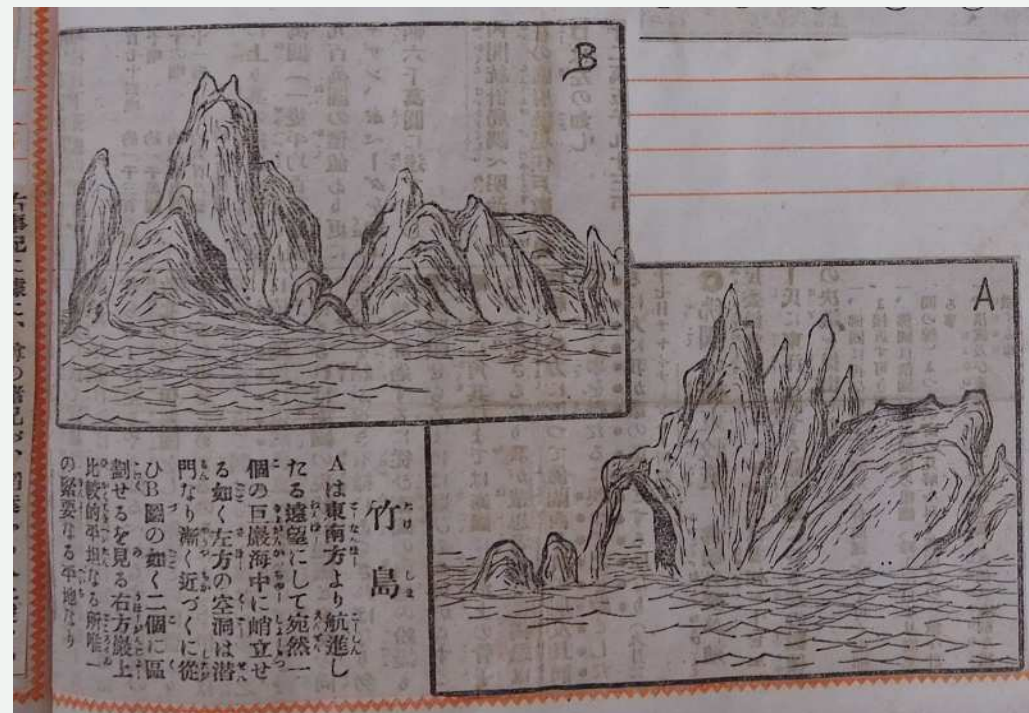
序に海驢の需用に就て一言せんに、三十六年之
を獵し大坂に輸出したるものありしも全く失敗
せしが、翌年に至り多少の需用あり、今日に至
りては製革業の進歩と需用の増加とによりて今
までは軍隊用背囊の表に附したるもの今は牛皮
の代用となるに至り脂肪は精製して鯨油に劣ら
ざる良品を得べく、肉は食用とすべく又肥料に
供せらる、油槽は膠に用るべき見込みありと云
ふ、

以上は僅々数時間の観察にして殊に専門智識を以
て調査したるにあらざれば浅薄皮相を免れざるべ
しと雖も大要は誤無きを信ず、近き将来に於て豫
て計画せる趣味ある竹島行を実行する場合には各
専門家の精確なる調査を為すことゝなるべし、尚
将来本縣に於ても種々研究を重ね、同島の生産を
保護し、以て本縣下の福利を増進することを期
すべし云々（終り）



竹島平面図

図中イ、ロ、ハ、の三点は船舟の碇泊し得る地点▲海驢はイの地邊に於て主に分娩哺育し口の邊に最も多く上陸して遊ぶ▲井は清水の湧出する地▲家屋形は漁獵会社の小屋▲ニの邊巖頭平坦なり



竹島

Aは東南方より航進したる遠望にして宛然一個の巨巖海中に峭立せる如く左方の空洞は潜門なり漸く近づくに従ひB図の如く二個に区画せるを見る右方巖上比較的平坦なる所唯一の緊要なる平地なり

若干の補足

■ 京都丸について

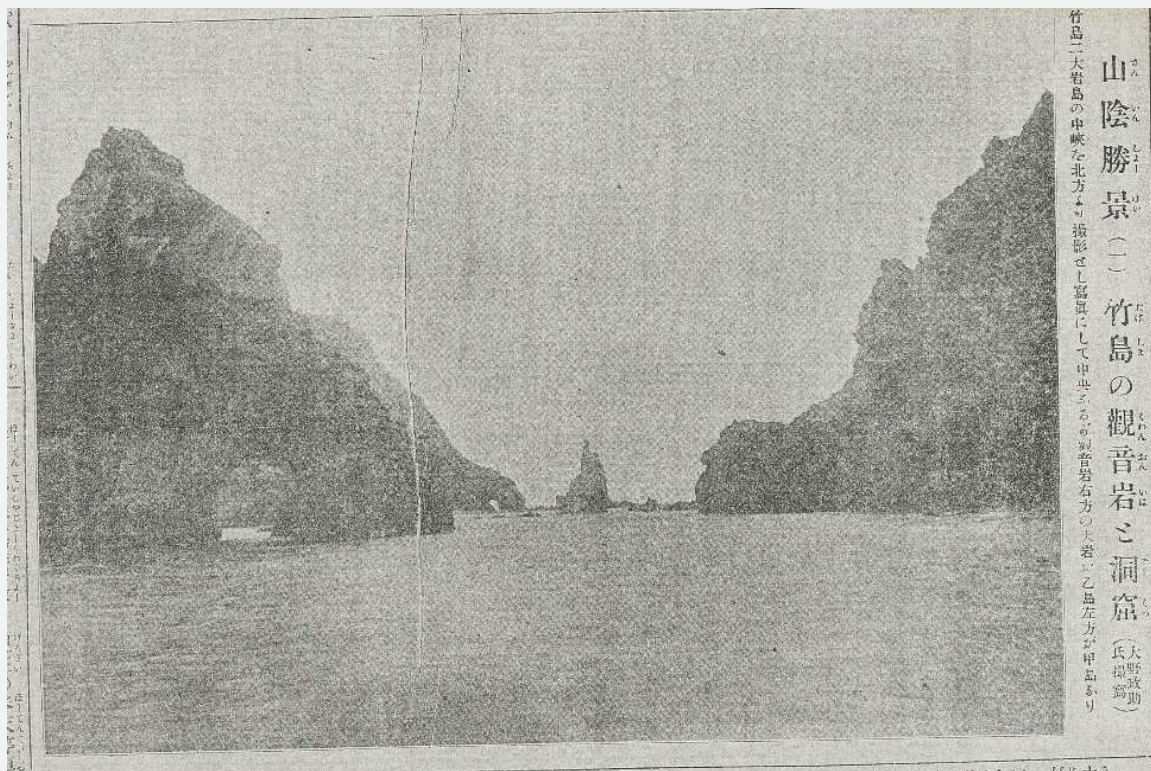
- 当初の計画では、松永知事は明治38年8月16日の朝、第二隠岐丸で境港を出発し、隠岐の西郷に寄港して東島司以下が合流する予定であったところ、8月15日に急遽、一旦延期になった。その後急に海軍御用船たる京都丸で行くことになり、隠岐には寄港せずに4名のみで竹島に直行した、とある。
- 京都丸は、有力な北前船主であった石川県瀬越の広海家が運航する2600トンを超える、当時としては大型の汽船（イギリス製）であった。海軍の御用船として日本海方面を主に航行していた。
- この航海で8月18日夜に美保関を出航し、19日竹島視察、20日に平田の十六島帰着という行程となっている。

■ 諸事情

- 知事の視察談では、

「漸く準備成りて去十六日出発せんとするに当り、天候不良となり当分延期するに至りしが、幸にして偶然の好機会あり便乗を勧められしを以て余等一行は先づ探險的に渡航したる次第」とある。
 - 海軍御用船の京都丸に好機会に便乗できた事情は不明であるが、
 - * 知事が薩摩出身で、日本海大海戦直後に第一艦隊を率い三保の関に入港してきた同郷の東郷司令長官を表敬訪問し、いち早く戦勝のお祝いを述べるなど、人脈が窺われること
 - * 「上京の際内務省に出頭し其費用を貰ひたる」視察で、国の支援があったこと
- などの事情が垣間見えるが、今後の調査を待ちたい。

②新聞に掲載された初めての竹島全景写真



山陰勝景（一）竹島の観音岩と洞窟

松陽新報は、明治39年5月24日付けの新聞社告で「山陰勝景写真募集」として「廣く山陰の名勝写真を募集し、審査の上優秀なものを本紙に掲げて読者の清覽に供せんと欲す」と、名勝写真を募集し、その後6月から陸続と新聞紙上で紹介している。

山陰勝景（一） 日付不明 「竹島の観音岩と洞窟」

山陰勝景（二） 6月13日付けで「出雲大社大鳥居」

山陰勝景（三） 6月16日付けで「米子沖中海より大山」

山陰勝景（四） 6月18日付けで「能義郡清水寺」

山陰勝景（五） 6月20日付けで「竹島全景」

山陰勝景（六） 日付不明 「玉造温泉」

山陰勝景（七） 6月24日付けで「医王山一畑薬師」

山陰勝景（八） 6月26日付けで「米子城山」

山陰勝景（九） 6月29日付けで「安濃郡羽根東村立神巖附近の絶壁」

山陰勝景（十） 7月1日付けで「浮浪山鱒淵寺根本中堂」

この山陰勝景（一）「竹島の観音岩と洞窟」が、現時点では日付は不明であるものの、県内新聞に掲載された初めての竹島全景写真であったと考えられる。

③初めての竹島特派員による現地レポート

松陽新報

奥原碧雲の「竹島及鬱陵島」に、渡航者一行の一人として「松陽新報記者 吉田行精」の名が記されている。また、同書に掲載された隠岐島廳玄関にて大野写真師が撮影した竹島視察員一行なる集合写真に、その姿を残している。

また、明治39年6月15日付け松陽新報の「道洞の鬱島衙門と渡航者一行」として掲載された記事中の写真にも（吉田本紙記者）として紹介されている。

■吉田行精（暁星）

浄土真宗真光寺（松江市奥谷町）第13代住職。明治12年3月13日生、昭和25年10月6日没（享年71才）。住職名は「ぎょうしょう」。行精は明治42年に住職となる。竹島視察は27歳の時。

山陰新聞

- ・島根県竹島視察団への新聞記者の同行について、山陰新聞には、次の記事が見られる。

明治39年3月11日 竹島行決定

3月14日 竹島視察の事「本社も之れか案内を受けたり」

3月16日 竹島渡航案内者

「案内を受けしは左の如く △新聞社」

- ・山陰新聞に視察団の視察内容が記事として掲載されるのは、明治39年4月1日からで、

明治39年4月 1日 竹島土産

4月 3日 竹島渡航日記（一）から

4月12日 竹島渡航日記（五）まで □旅行者某生

とあるが、これらの記事を誰が書いたかは不明。

- ・奥原碧雲の渡航者一行に山陰新聞記者の名前がないことから、山陰新聞は記者の派遣はせず、渡航者の誰かがこれらの記事を書き送ったものと思われる。

・今回判明した碧雲切抜帖には、松陽新報に掲載された記事として、今まで知られていない竹島視察団の渡航状況、竹島の現況、鬱陵島の状況が詳細に紹介されている。

明治39年3月 * 「隠岐より (一)」から

「隠岐より (四)」まで ■吉田生

* 「竹島の海驢 (一)」から

「竹島の海驢 (三)」まで ■特派記者

* 「竹島の話 (一)」から

「竹島の話 (三)」まで ■特派記者

* 「蹴波記 (一)」から

「蹴波記 (八)」まで ■春風萬里生

明治39年4月 * 「鬱陵島見聞記 (一)」から

「鬱陵島見聞記 (五)」まで ■渡航記者

・これらの記事は、署名の違いはあるものの、いずれも吉田記者による現地レポートと考えられる。

・ 「山陰中央新報社120年史」によれば、

「相見繁一（香雨）は古美術研究の権威で琳派研究の第一人者として著名だが、若いとき松陽新報の記者として活躍した。昭和19年3月、東京で空襲に遭い、松江市奥谷町の真光寺に疎開。同寺住職吉田行精（暁星）は松陽創刊の頃からの記者。相見とは顔なじみで36年ぶりの再会だった。吉田は風呂敷に法衣を包んで出社、新聞社から法要に駆けつけたという逸話の持ち主で、松陽退社後、山陰新聞に移って二年間、編集長をつとめた。昭和25年亡くなった。」とある。

・ 「一老美術学者 相見香雨の回想」（森山時雄）には、

「東京で戦災に遭い、疎開先を郷里松江市の真光寺に求めたのは、住職の吉田行精がかって先生の松陽新報時代の同僚であったからである。先生は「この和尚はなかなかの学者で、しかも稀に見る文章家だ」といっていた。」とある。

